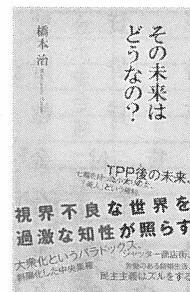




『その未来はどうなの?』

橋本 治著
集英社新書 756円



一年の計は元旦にありとの古諺は真実である。言い換えれば未来について考え抜くことは、古立派な仕事である。それだけで十分成立しうる自律的な活動である。何かを問うこと、それにについて考え抜くことは、回答を得るのは全く異なる頭脳の使い方を要求するからだ。

昨年は変化の大きな年であつたとされるが、大切なのは変化の意味を解釈することにある。新聞の一面に見る記事が必ずしも本質的な変化とは限らない。気に病んだことは起こらず、思わぬところから世の中が変化していくことが多い。かえつてベタ記事程度の扱いでも、世の中に巨大な意味を持つ変化は山のように存在する。

この本はそんな未来を見ていくうえで、示唆に富むものがある。取り扱われるトピックは経済、TPP、歴史など、比較的なものが並ぶ。しかし、

テレビもまともにみなかつたといわれている。彼は地元新聞数紙の購読だけでも、世界でもきわめてオリジナルなものを見方を引き出していた。情報源はオリジナルナリティを保証しない。思考上のオリジナルナリティさえあれば、何を見てもオリジナルな解釈が可能となる。

一年の計

著者は経済の専門家ではない。広い意味での人文系の物書き、いわば文筆家である。非専門家の意見はある面で専門家よりも信憑性が高い。非専門家は自らの印象や知覚を自ずと大切にするし、何よりも、定見に縛られない。「知らない」というのも、考えるということも、それ自体が目的である。

同じ車窓の風景を眺めても、異なったとされるが、大切なのは変化の意味を解釈することにある。新聞の一面に見る記事が必ずしも本質的な変化とは限らない。気に病んだことは起こらず、思わぬところから世の中が変化していくことが多い。かえつてベタ記事程度の扱いでも、世の中に巨大な意味を持つ変化は山のように存在する。

著者は経済の専門家ではない。広い意味での人文系の物書き、いわば文筆家である。非専門家の意見はある面で専門家よりも信憑性が高い。非専門家は自らの印象や知覚を自ずと大切にするし、何よりも、定見に縛られない。「知らない」というのも、考えるということも、それ自体が目的である。

この本は、「わからない」からスタートしている。なぜ自分はTPPについて確たる意見がないのかを疑つてみると人は少ない。なぜそのことについて情報があるのかよりも、なぜそのこ

最後の最後にいたるまで、別に答えるが出てくるわけではない。それでも読後不思議な納得感がある。

少なくとも、未来について確たる回答を得るのは望み得ない。ちょっとと考えてみれば、私たちはつい20年前まで、イデオロギーを軸に政治家を選んでいた。今ではイデオロギー政党ない。なぜそのことについて情報があるのかよりも、なぜそのこ

過去に正答を持たない。生きているのだから当たり前の。生きてとについて情報がないのかを問うほうが一段も二段も高い知性の使い方をしている。

さらに一歩進んで、私は何を知るべきなのに、あるいは知つていいはずなのに知らずにいるかも問うならば、それは著者推奨の知性の使い方に通じる。

ある。エコロジカルなものは、現実とはメカニカルなものではない。エコロジカルなものは、

社会生態学研究者 森里陽一

『戦後史の正体』



孫崎 享著
創元社 1575円



話題になつてゐる本である。世に陰謀論というべきものは多く存在する。本書をその一つとする見解が世間にないわけではないのだが、評者はそうではないと思う。

もうだいぶ前に読んだ心理学者の岸田秀氏の書物で、日本人がなぜ英語が苦手なのかという問い合わせへの分析があつた。確かに敗戦、占領、その後の支配への屈辱とそれに伴う無意識の反発から、心の底では英語など学びたくないと思つてゐるからといふのが回答だつたように記憶している。いわば無意識の抑圧という現象だ。

そんなことを念頭に置くと、この本は一貫した実証性を兼ね備えている。一つの柱は著者自身の外交官としての経験と知覚である。戦後、日本人が一般に思ふ以上に、アメリカの上層部が日本の政治運営に陰に陽に関与し、端的に言えばアメリカの

世界戦略の手駒として日本が活用されてきたと言う。

もう一つは資料の実証性である。本書の大半は著者の想像によつて書かれたものではない。いくつもの外交文書や当時の人々によるドキュメントのたぐいが丹念に引証されている。とにかく政権運営に当たつた総理大

日本人が今読むべき

のなかに浮かぶ陰影を明瞭に描いてみせた点で、何よりスリリングな読み物に仕上がつてゐる。仮にここで書かれていることがまつたくの事実誤認だとしても、一読に値するのは間違いない。

その不思議な説得力は、確かに主張点に沿つて振り返れば、おおよその事実の流れに説明がつくところにある。だが、ここで大きな疑問符が浮かぶ。それは「なぜそれほどまでの巨大な力をわれわれは知らずにいたのだろう」というものだ。

だが、この本の基本的な立場は、それ以上に日本国民がそれ

を知らされなかつたこと、もつと正確に言えば、冒頭の岸田秀

の英語論と同じように直視したくなかった、無意識に避けてきたためではないかと言う。

本書は昨年のベストセラーとなつた。評価は多岐にわたる。

が、内容がまつたくの偽りとは考えにくい。いや真偽のほどよ

りも、日本人がそこで一つの視

点を得たことが最大の意義のよ

うに思われる。その大半は今後

意識的に検討し明らかにされる

べき問題である。

そのような意識上の定点を持

つならば日本は本当の意味で自

らを変革しうると思う。

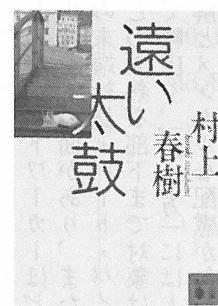
実際に、記述の一つひとつに自分が知る戦後史を重ね合わせると、思い当たるふしがたくさんあることに気づく。なぜそのことに気づかなかつたのだろうと思う。

アメリカの存在が巨大なことを知らない人はいない。だが、いかに日本が敗戦国とはいえ、

社会生態学研究者 森里陽一



『遠い太鼓』



村上春樹著
講談社文庫 840円

ジカルにわかる場だからだ。

確かに陳列棚はテーマごとに細かく分かれている。分かれているけれども、読み手の頭の中までビジネスとか文芸とかに分かれているわけではない。それ

働くためだ。だが、評者とていつも便利的な書物のみを手にするわけではない。読書というの

は、もつともカラフルで、ソリッドで奥行きの深い行為なのだ。

仕事柄もあつてよく書店には行くけれど、最近とみに感じるのは、「いつたいこの本はどん

旅への誘い

時々思うのだけれど、読み手は書評欄に何を期待しているのだろうか。あるいは何を求めているのだろうか。金融業界の雑誌だし、少なからざる読者は金融関係と推察される。それは必ずしも間違っていないと思う。それなら、金融関係とかビジネスとか、あるいはちょっとひねつても自己啓発あたりが無難なラインではないかと。しかし、金融機関に勤めているからといって、24時間金融のことばかり考えて人は生きているわけじゃない。金融マン(あるいは金融パーソン)の人生にも、いろんな粒子状のグラデーションがあるし、時に全然緩い書評があつてもいいのではないかと思つて、それが僕に軽い葛藤をもたらしてくれたりもする。正直なところ取り上げる本すべてが意に染むわけではな。本の選定にはある種の便宜

というか、機能的な思考が常に働くためだ。だが、評者とていつも便利的な書物のみを手にするわけではない。読書というのは、もつともカラフルで、ソリッドで奥行きの深い行為なのだ。

仕事柄もあつてよく書店には行くけれど、最近とみに感じるのは、「いつたいこの本はどん

な人が買つていくのだろう」となる本とそうでない本の二種類になる。僕はそう思う。だ。ビジネス書にその種のものが多い気がする。

それでも、やはり書店は素晴らしいと思う。書店はそれ自体が一つのメディアで、いま人が何を考え、感じているのか、手の

旅行記はあまり読まなかつた。この文庫は、彼が1988年のベストセラー「ノルウエイの森」のほとんどを書いたギリシア、ローマ、ロンドンの3年ほどの

生活を綴つたものである。さつき旅行記と言つたけれど、厳密にはどこにも分類されない、あるいはどこにも行けない。そんな種類の本だ。

彼の書くものは不思議な郷愁觀がある。それは何も教えないし何も説かない。彼はただ書いた本と手に取る気がしない本(あるいは存在にさえ気づかない本)の二種類しかない。もしくは、読み出したら止まらなく

たいて本と手に取る気がしない本と体にしつとりと染みこんでくる。この本を手にすると、彼(と彼の奥さん)と一緒に遠い太鼓に誘われた旅に出たような気持ちになる。

社会生態学研究者 森里陽一

『テフレーション』

吉川 洋著

日本経済新聞出版社
一八九〇円



わかりやすいキャラクターと、専門家と自称する人たちには気をつけたほうがいい。さへ

新しい政権が経済運営をはんじめて景気に対する上向きの言説が巷にあふれるようになつた。さほど経済に興味がない人でも、株価がゆるやかに上昇していることや、円安によつて輸出産業の賃金が上がつていてことを知つてゐる。

全体がやや前のめりになつているときに、親切かつ客観的な助言をすること、これができるのが専門家の存在意義だと思う。その意味では、「世に冷や水を浴びせる」発言を平然とで生きなければ専門家の資格はない。

特に経済学は現実と離れて成立しえない学問だから、なおさらである。「アベノミクス」で採用される（と思われる）いくつかの基本的な前提についても考

えるヒントを与えてくれるところがいい。本書は専門家の責任にみごとに応えている。

9年代以降、20年近くも物価上昇がなく、ゼロ%近傍にある。なぜデフレから抜け出せないのか。

日本のデフレについては、これまで侃々諤々の議論がなされてきた。デフレは日本経済が要

専門家の応答責任

いことの結果であるという考え方

いことの結果であるという考え方の方他と、デフレだから日本経済が駄目なのだとする考え方があつた。デフレは原因なのか結果なのかが争点だつた。いずれにしても、デフレが歓迎すべき状態ではないといふ一点では共通していた。

「デフレーション」は正確に言

「世界的に標準的な経済学」がどの程度の現実の説明能力を持つかへの解説姿勢である。リフレ派の経済学者や、クルーグマンなどなど世界の経済学者に対しても、かなり鮮明な対決姿勢を感じ取れる。著者は伝統的な意

が真摯さの表れである。人は逆境に対しても謙虚になれる。失敗を糧とすることもできる。いちばん危ないのは、何でも上向きばなである。風邪でも何でもみなそうだ。そんなときに専門家が貢献できなければ意味がない。まさに乾坤一擲、時宜をとらえた一冊だ。

えれば罹患率の恐ろしく低い病気
に似ている。では、なぜ日本が
それにかかるてしまったのか。
デフレーションがなぜ起つた
のかについては、たくさん論争
がある。それらは軽く紹介す
るのみにとどめて、深くは立ち
入らない。反対に問題を経済学
者らしからぬほどに、広い視野
から分析していく。

参考される資料も幅広い。学
術書や論文だけでなく、ビジネ
ス書やジャーナリストイックな
ものも入っている。これも正統
派の経済学者としては相当に勇

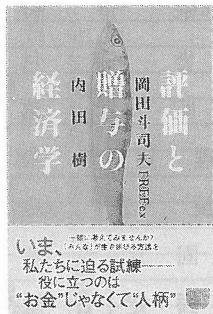
学者であるが、めずらしいことのように見える。語り口はたぶんていねいに読めば高校生でもわかるレベルである。といつても変なレトーリックは使わずに、シンプルなロジックを誠実に重ねていくように立論されていく。そこが本書の説得性を高めている。わかりやすいとはいっても、経済学の語彙や論理に疎い方には難しいところもあるだろう。だが、一読すればこの本が真摯に現実と向き合う論を立ち上げようとしていることは理解されると思ふ。著者が自ら生きてきた経済学への疑義を結論としているのが真摯さの表れである。

社会生態学研究者 森里陽一



『評価と贈与の経済学』

内田 樹・岡田斗司夫著
徳間書店 1000円



刺激的な対談本である。対談本は中身が薄い、そんな一般に流布される定説をみごとに覆してくれる。タイトルはちょっと硬めながらそれもご愛敬で、じつに軽快に知的刺激が得られる本である。

そもそも内田樹と岡田斗司夫という、異色な取り合わせのようで、よくよく考えると異色でも何でもない二人、その知的共同作業が面白くないはずがない。二人ともに周辺から世相をありのままに教えてくれる。

ただし、二人の考えは方向性において似ているのだが、アプローチにおいてはかなりの違いがある。内田は本来フランス現代思想の学者だし、岡田はオタク産業の教祖のような人だ。ともに現代文化を扱っている点では同じながら、立ち位置にはかなりの開きがある。二人の対話の、ぜひ手にとつて読んでほしいと思う。

対談本にも面白いのはある

いなものをつくつていけば、むしろ日本社会などはさらなる展開の余地が無限にあるのだといふ。このことは、本当はもつと詳細に紹介したいのだが、本書において似ているのだが、アプローチにおいてはかなりの違いがある。内田は本来フランス現代思想の学者だし、岡田はオタク産業の教祖のような人だ。ともに現代文化を扱っている点では同じながら、立ち位置にはかなりの開きがある。二人の対話の、ぜひ手にとつて読んでほしいと思う。

自ら意識的に視覚を働かせ、聴覚を起動することが大事なのだということを教えてくれる。というのも、この二人に共通する。このことは、本当はもつと詳細に紹介したいのだが、本書において似ているのだが、アプローチにおいてはかなりの違いがある。内田は本来フランス現代思想の学者だし、岡田はオタク産業の教祖のような人だ。ともに現代文化を扱っている点では同じながら、立ち位置にはかなりの開きがある。二人の対話の、ぜひ手にとつて読んでほしいと思う。

が異なる色彩感覚を演出しながら、最終的には風通しのいいオーブンな結論にいたつている。

たとえば、私たちはなんとかお金がなければ生きていくのが勝手にそう思いこまされて生きている。だが、二人の意見は違う。贈与とか、疑似家族みたいふだんわれわれはいろんな種類の情報に頭脳の中を牛耳られている。近年はネット情報などもある種の情報上の汚染状況を演出来しているふしがある。だが、そんな時代状況だからこそ、

あるいは、一番頼りになるのは人柄のよさであるという。なかなか近年の資本主義社会では口にされない言葉だ。だが、不思議な説得力をもつて語られるのは、何らかの時代のリアリティを反映しているためだと思われる。

ふだんわれわれはいろんな種類の情報に頭脳の中を牛耳られている。近年はネット情報などもある種の情報上の汚染状況を演出来ているふしがある。だが、そんな時代状況だからこそ、

特徴付けられるからだ。

だからこそ、言うことはみんな当たり前の、万感の重みがある。考え方の枠組みを変えさせられるような、思考システムの大変なネジをきつく締められたささやかな現実に目を向けさせられたということでもある

それは見られることのなかつたささやかな現実に目を向けさせられたということでもあるし、もつと言えば、無意識に避けている社会のポジティブな面を意識的に見る機縁を得たということでもある。

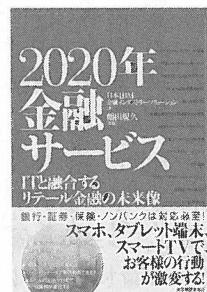
評価とか贈与は本書のキーワードではあるけれども、語られる内容の一部に過ぎない。本当にいい本の条件はささやかしているのは、身体を動かして生きてきたこと、そして自分の目で見取られた現実をどこの誰とも知らない他人の言うことよりも尊重してきたこと、の二点で

社会生態学研究者 森里陽一

書評

『2020年金融サービス——と融合するリテール金融の未来像』

日本IBM金融インダストリー・ソリューション著
東洋経済新報社 2625円



2020年というのは、遠すぎもせず近すぎもしない、奇妙にリアルな未来である。そのなかで金融業はもつとも早く成立した知識産業の一つであるが、近年は苛烈なまでの変化スピードにさらされている。

世界の金融がどのような潮流になつてゐるのか。時に想像力をフル稼働させつつ、時に今ある現実がどう変化していくのかを丹念に読みながら展開された本である。銀行業界のみならず、証券業界、ノンバンク業界、保険業界まで網羅的に近未来を読んでいこうとする。

やや章ごとの独立性が高く、執筆分担があるために、微妙に問題の捉え方や視角や文体が異なるところが読みにくく思われることもない。だが、通して読む本というよりは、関心のあるところを拾い読みしていくのに、この本は適している。

ように思う。

本の妙味はそれぞれだ。じつくり読む本にはじっくり読む本なりの持ち味があり、ざつと概要を掴む本にはざつと概要を掴む本なりの持ち味がある。章によつて問題意識は微妙に異なります。されば、2020年あたりに到来していはるはずの変化をつい

近未来はもつとも予測しにくい

ねいに織り込んで、時に未来的エピソードを交えて説明する。一貫した関心は、価値のチャネルの自由化にある。これまでお金という現金を意味したが、今はカードやポイントまで含めれば、お金がますます定義をにくくなっている。その様態をしつかりと描いているのが

は三つある。一つは、顧客の変化である。2020年といえども、物心ついたころにはデジタルに接していた世代が成人を迎えるころである。彼らはどのようなものを選び、どんな行動をとるのか。

第二に、高齢化の影響である。日本の富は過半数以上を高齢者

たとえば、タブレットを使用することによって、消費者の金融行動は確実に変化させられてしまいます。まして、金融資産の主たる保有層である高齢者がスマートフォンにしだした現在にあつてはますますその風潮は高まつていいだろう。

筆者がとくに興味を持ったの

つの特徴と言つてよい。

そのチャネルの変化は、「情報主導型の変革」に先導されるものであつて、情報そのものの流通と不即不離の関係にある。

たとえば、タブレットを使用することによって、消費者の金融行動は確実に変化させられてしまつます。まして、金融資産の主たる保有層である高齢者がスマートフォンにしだした現在にあつてはますますその風潮は高まつていいだろう。

筆者がとくに興味を持ったのは

が保有している。彼らを主たる顧客とすることは、金融業のみならず現代の日本産業では避けられない宿命である。そのと

きにさらに活躍の場が増えるスマートフォンなど、電子機器に対する問題意識が及んでいる。

第三に、キャッシュレスの動向である。世の中は流れとして、現金どころか、従来の貨幣がそのコンセプトにおいて根本的変容をとげているように思われる。それは価値の定義を困難とし、その流通形態を不明瞭なものとする。

そのほかにも本書の守備範囲は広い。ある種の未来に出てくると思われるもののカタログ的な価値があり、ページをめぐりながら、そこから派生する変化や事象に思いを馳せてみるとおもしろい。

金融は専門性の高い領域であつて、市場から眺めてみるとまた別の感興を呼び起こす風景に出合えるかもしれない。

社会生態学研究者 森里陽一

『まざい「一メソノ屋はどうして消えた?」
—「椅子取りゲーム社会」で生き残る方法』

岩崎夏海著
小学館新書 735円



まずいラーメン屋は
どこへ消えた?
「椅子取りゲーム社会」で生き残る方法

累計272万部の人気セリフ
「もしドラ」
作者の
新社会論

あなたが考える「」は
本当の「顧客」?

個人-主考が、受験者へき一生懸けの懇願

見て、気に入つたものを見つけるとおもむろに懐からスマートを取り出し、アマゾンで購入する。評者にも身に覚えがなくはない。寺ヶ書店でそしよ丁助を二

の作法が簡単に身に付けられる。ならかくもありがたいことはないが、残念ながら無理というものが、だがもつと大事なことを考へておられる。著者は改えてくれている。

人は圧倒的な変化に際して、未知の希望よりも、既知の絶望を選ぶ。変化を好みもあるのと想わないのは、人間精神の主要な部分を構成する性である。それ自体をあれこれいつてもしかたがない。問題は、どう変化に処するか、あるいはどう変化をしのいでいくかである。ビジネスを考えるうえでの材料が、どんなときもビジネスのなかだけにあるとは限らない。

かな人間活動にもその本質は現
れているはずだ。この本には、
そんなささやかだけれど大切な
何かに目を向けさせるだけの力
がある。

鑑屋かもしれない。いずれもひつそりと半世紀以上を生き延びてきた店が、いつの間にか霧のように姿を消してしまった。インターネットが人々の手に渡つてからだ。今では現実の書店や家電店は、維持管理に異常なコストをかけたショウルームになつたという。実物はそこで

避けえない現実にどう対処するか

所与の現実であるとともに、私たちの内面で進行する現実の一
部ともなっている。

著者は言わばとしれた『もし
ドラ』の作者であり、AKB48
のプロデュースに関わった当事
者の一人でもある。いわば変転
してやまぬ現実と起臥をともに
してきた人である。そんな才人

好みいのは単なる成功本の
たぐいと違つて、ごくふつうの
目線と地に足着いた考え方が一
貫している。私たちはあの幼少
期に目にしたラーメン屋が知ら
ないうちにふつと時代の狭間に
消えてしまつたことを知つてい
る。確かにのは、それらが二度
ともどつてはこないということ
だ。この本は、過ぎ去つた時代
を直視する勇気を与えてくれ
る。同時に、未来に顔を向ける
勇気を与えてくれる。

や二つを知っている（なぜ成り立っているのかわからない）。でも現に成り立っている、そんな店の一つや二つを知っている。だが、ある時からそんな店が成り立たなくなつた。時にそれはラーメン屋でなく、喫茶店かもしれないし書店かもしれない。和菓子屋かもしれないし印

り、そんな現実以上に、その変化に対応する自分の行動の変化に驚かされる。そのような風潮を嘆いてもしかたがない。それが本書の基調である。もはや私たちはほかの現実を選ぶことができない。それはすでに私たちを取り巻く、

の考え方だ。陳腐化の激しい変化の時代だからこそ、生きるうえでの戦術は長期を織り込まなければならない。ここで詳しく述べはしないが、一つひとつが、実体験に裏打ちされていて、しかもシンブルである。

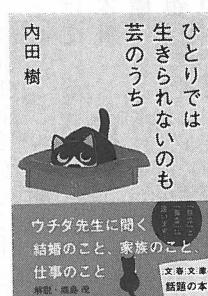
好みいのは単なる成功本のたぐいと違つて、ごくふつうの

社会生態学研究者 森里陽一



ひとりでは生きられないものたち

内田 樹 著
文春文庫 600円



夏、書店に花畠の花がいつせいに咲いたように文庫が並ぶようになつたのはいつからだろうか。夏休みだから、少しは古典を読む時間がとれるからだろうか。何より読書感想文という抜き差しならない義務は今もあるのだろうか。

私は知らない。

ネットが一般的になつて、ツイッターとかフェイスブックといったSNS経由で、わりにちょっととした情報なら労せずして入るようになつた。

巷間言われるのは、ネットが情報選択を多様化したというものだ。今まで新聞やテレビなどでも、ついにスクリーニングされた選択肢しかなく、それが結果として世の中の価値判断の堅固な礎たりえたのだ。もちろん私はそうは思わない。かえつてネットが普及してか

ら、人の情報チャネルは極端に狭くなつてているように思える。本来知識や情報は世界を広げる方向に働くはずなのに、なぜか気がつけばネットを使う人ほど世の中が狭くなつているように感じられなくもない。

ときには頭の中のそらじを

ことがあると思う。新聞やテレビなら、いやがおうでも自分と無関係であつたり、嫌いであつたり、関心のない情報が目に入らざるを得ない。株をやつていいようがいまいが、新聞には株式欄があるし、ラジオしか聞かないという人の家にくる新聞もテレビ欄がある。

文章からなるものである。内田氏の言説が現在いささかなりとも特別な光沢を持ちうるもの、情報の雑さの価値を知つたうえで発信しているからだと思う。内田氏の書いたものを私はやや推奨しすぎる嫌いがあるいはあるかもしれない。だが、昨今アベノミクスとか憲法に関する著者だと思う。

どうも人間の情報の判断能力は、自分の頭脳に快いものばかりでは次第にその能力を下げていくようだ。そんな気がする。

だから、時にはあえて雑な情報を入れるのも、一つの知識的衰退を避ける方法と言えそうだ。たぶん夏になると定番の純文学がカバーを変えて書店に現れるのも、単に本が売れない昨今における出版社の奸計以上の何かがありそうである。

この本は内田樹氏によるブログとか、エッセイとか雑で短い

る議論を見るにつけ、あまりに反対意見が出なさすぎるので、和感を持つ。

一国の経済政策や政治が、ほんとに実行に移されていくのを見るのは、一国民としてとてもつらいことがある。なぜなら、異論の出ない意見ほど恐いものはないうことを私たちは知っているからだ。それは危険なことだし、警戒すべきことだ。

政策立案者たちはみんな眞面目な人たちだ。眞面目な人たちに論理で勝つのは難しい。いちばん効果のある手法の一つは笑いを活用することだろう。肩の力を抜いて、少々冗談交じりに、時に逆説的にそれでいて浸透力の強い言説である。

私が時々氏の文章を無性に読みたくなるのは、たぶん頭の中にたまつた埃とかごみの類をクリーニングしてくれるからのようにも思える。夏の靴に一冊入れておきたい著者だと思う。

社会生態学研究者 森里陽一

書評

『ドラッカー 教養としてのマネジメント』

ジョゼフ・A・マチャレロ＝カレン・E・リンクレター著 阪井和男他訳
マグロウヒル・エデュケーション 3990円



ドラッカーの発言がじつにさまざまな領域で引用され、言及されているにもかかわらず、今ひとつ既存の経営学のなかでしつくりこないのはなぜだろうか。彼のマネジメントには、経営学を超えた何かがあることを感じる人は少なくない。本書は、アメリカのドラッカー研究者が、その問題意識で鋭く切り込んだ労作である。

今では高校野球の女子マネージャーのみならず、糸井重里氏などのクリエイターから、超巨大企業のCEOまで、ドラッカーに学んだ事実を明言する人々が少なからずいる。だが、果してドラッカーの語ったことは「経営」だったのだろうか。そのような疑念がずっとつきまとってきた。

本書の主張に従えば、ドラッカーが経営を語ったのは事実であるけれども、それは彼の語つ

た言説のごく一部をなすにすぎなかつたということになる。では、彼が本当に言いたかったことは何だったのか。

その探索が本書のテーマである。そして、ドラッカーの業績の核心に迫る一本のアリアドネの糸が「教養」ということになると、教養とはリベラル・アーツとも言う。いわば自由のための

教養の歴史が緻密に展開される章があつて、容易に手を伸ばしにくい側面も持つ。それでもなお本書を薦めたいと思うのにはいくつかの理由がある。

一つは、今の世の中が再び極端な形での経済偏重の噴出を見せつつの傾向にある。現下の経済至上主義への批判的視座は、本書のぶれることのない一貫した視点と重なる。

教養というのは、どこまでいつても人間に関わるものである。ある種の人間主義的な視点

意味を持ち始めているところにある。ドラッカーの考えによれば、マネジメントは決して企業の専有物でもなかつたし、利益を最大化する方法論でもなかつた。それはどこまでも社会のものであると同時に人間のためのものだつた。

忘れられた思想経由を読む

リベラル・アーツはギリシア時代以来、欧米文化に連綿と受け継がれてきた思想内容を持つ。それは哲学・思想など高度な人間の精神的営みそのものである。本書は全体に分厚い本だし、内容としてはかなり難解なもののが、新しい教養としての

が教養の重要な背骨をなすならば、現状を的確に批判しうる知識は徹頭徹尾、社会的人間的帰結に关心を持つ知識にしかない。そ

こに現代人が見落とし続けてきた「隠された」価値内容がある。もう一つは、マネジメントそのものが、多くの含むものがある。

意味を持つとしているところに活動の一つひとつが社会を多様なものとし、まさにその多様性の創出によって世界にエネルギーを与えていく。

記述方法は決して容易ではないのだが、概要については現代を生きるものにとって重要な示唆をあまりに多く含むものがある。

社会生態学研究者 森里陽一



「生物多様性経営」—持続可能な資源戦略

足立直樹 著

日本経済新聞出版社 1785円



生物多様性というテーマは近年企業経営でもしばしば耳にするものの一つとなつた。企業が年次で公にするCSR報告書の類でも、生物多様性は一項目として独立した扱いを受けることが多いなつていて。

本書は生物多様性と経営をきちんと取り扱った基本書としての意味を持つ。そして、そこから現代を生きるわれわれが学ぶべきことは少なからずある。

その一つは、商品やサービスを開発するうえでの発想である。

生物多様性経営は、おおげさに言えば、現在ある文明の先の「見える文明」を予感させるものが、現在ある文明の予感させるものがある。資源をはじめとするさまざまな制約条件が、日々厳しさを増している。それらは今ある文明を所与とする限りにあって制約条件ながら、まったく新しい角度から照射するならば、異なる文明像や社会像が見えてくる

はずのものである。

本書は、その可能性について、ていねいに教えてくれる。おそらく著者本人のバックグラウンドが経営等の社会科学ではなく自然科学にあるせいとも思われるが、その一つひとつ発想や語彙に新鮮なものがある。手あかのついていない、豊かなターミナロジーで、見える経

すでに現実の形成動因

當の在り方を浮かび上がらせる。もう一つは、多様性についての考え方である。多様性とは決して美しいコンセプトやスローガンではない。この世界に伴う率直かつ平明なる現実である。それぞれの生物が本来持つ資質や能力は多元であることがごく自然なことである。多元であ

ることが社会をしなやかでがつ強靭なものとする。人間社会も同じであつて、自然の生態系に負けず劣らず多様で豊かな生態系を持つている。

通常なら、生態系とか多様性という言葉は、企業経営に当たつては何らかのメタファーとして語られることが多い。しかし、本書においてはすべからく、比喩ではなくシンプルな現実として語られている。そして、シンプルな事実に学ぶほどに経営や社会を豊かに

して何かを言つても、それはど意味はない。人々はそれぞれの局面で、それぞれの形でベストを尽くしてきたのに違いないからだ。だが、起きたことから

社会というものは当然に成立するものではなく、繊細な無数の配慮をもつて成り立つものである。社会や文明というものは、前の世代から慎重な配慮をもつて受け、そして、同じ

程度の慎重な配慮をもつて次世代に引き継ぐべきものである。あくまでも直観にすぎないが、本書は次なる新たな社会の構想に当たつて、優良な教科書たりうると思う。それというの根底を問われる災禍に見舞わまさに人間の「不完全性」が多様性の源であつて、そこにこそ進歩のためのチャンスがあることを示唆してくれるためにほかならない。

社会生態学研究者 森里陽一

書評

『賢人の思想活用術』

佐藤 優、白取春彦、上田博生、小川仁志、本多弘之著
幻冬舎 1365円



哲学や思想などと、かび臭い書斎が想像されるのはなぜだろうか。哲学・思想に限らず高尚な知識が現実的有用性をもちえないとする信憑が今日にまで至っているのはなぜだろうか。 ドラッカーは四十年余り前『断絶の時代』で、知識が役に立つ時代になったと述べ、知識社会と呼んだ。知識社会とは、知識が現実的に役に立つ社会、知識が観念のみでなく、現実世界のプロモーターとなる社会をいう。今ようやくにして、知識の王ともいえる哲学・思想がかつてと比較すればかなり注目されるようになつていて。

一つに説明のためのメタファーが多く表れたこととも関係しているだろう。代表がＩＴである。ＩＴの世界は高度な抽象的システムがそのまま現実を規定する世界である。比喩的にいえば、「ネットの世界は「可視化された精神世界」だ。そこで

は何を考えているかが、価値や期待や欲望とそのまま直結している。PCでいえば、どんなOSを採用するかが、アプリケーションの高度さに直結する。質の高い哲学とは、質の高いOSを脳に導入するのと同じである。そこから現実的なアプリケーション

の切れ味をもつて心に迫る。

そのためか、それぞれの論者

慮がありがたい。

考へることと使えることは、

致命的に泣き別れて現代に至つるものがある。いざも平明な言語で語られていないながらも、しつかりと手になじんだような安心感がある。たとえば、「二者択一」を避けよというの

の世界だつた。現代の潮流は、明らかにドラッカーの言う知識複数の論者によつて語られてゐる。これはおそらく偶然ではない。ある種の叡智の現れ方である。「あれか・これか」になつた時点では、人は判断を間違える。かならず選択肢を増やせ、最低

思想は役に立つ

ンや、他分野への応用などは自由自在にできるはずである。本書がもつともすぐれているのは、まさに知識に対する切り口である。あるいは、知識に対する過小評価を繰り返してきた人生の奥義に通じる哲学的考察としてよいと思う。

でも三つは持てといふ。これは時代では、基底となるソフトウェアの造成には手を抜きがちである。だが、根にかかる部分の生育には一般的にいつしかるべき長い時間と、しかるべき繊細な配慮を必要とする。本書をペラペラとめくつたからといって、哲学思想が身に付くわけではない。大事なのは知識に対する畏敬の念と、それを維持しながら知識の持つ新しい意味を知ることである。知識の語源

哲學と難解さはほとんど同義だった。簡単な哲学などは、首の短いきりんと同じくらいの語義矛盾だった。本書では、何より読みやすさに的確な配慮がこらされている。読むというより見ることで吸収できるような配

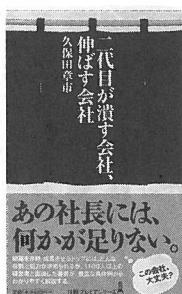
社会生態学研究者 森里陽一



『二代目が潰す会社、伸ばす会社』

久保田章市著

日本経済新聞出版社 893円



ここ10年から15年ほどで、廃業を余儀なくされた中小企業はとにかくにも多い。戦争や労働争議、その他もろの社会的危機を乗り越えていた企業の多くが、90年代後半以降の変化の前に膝を屈した。

一つには人口問題があるだろう。日本の人口構成は大きく変動している。商店街のような業態が成り立たなくなつたのは、人の「流れ」が変わったからである。今まで人が集まつたところに人が集まらなくなつたからである。あるいは今まで人が集まらなかつたところに人が集まるようになつたからである。さらには、人を集める新たなチャネルが出現したからである。

情報化の流れもある。商品やサービスの比較がいとも容易に可能になった。流通経路も変化した。わざわざ出向かなくて、ワンクリックで家まで配達

してくれる。さらに、ライバルが国内だけではなくなつた。どこかの国では聞いたことのない中小企業ともしのぎを削る競争が不可避となつた。

今経営をめぐる変化は枚挙に暇がない。あまりに複雑で多くの話題が現れては消えていく。

企業社会の見えざる要

ほうつておいても日々が忙しく、目の前の課題をこなすのが精一杯で、なかなか中長期でものを考えるゆとりがない。

しかし、本当に大切な問題が忘れられている。それは経営の承継の問題である。まがりなりにも現在まで経営を行つてきた人々の思いは、想像するにあま

こぎ、しかものんびりするまもなくなんとか大海を乗り切つてきた。にもかかわらず、これまでとは違う激しい風雨のなかで、誰が舵取りをするのか。

著者は企業経営者をめぐる現状をつぶさに観察し、この経営承継についていくつもの示唆に富むポイントを教えてくれる。「後継ぎが見つからない会社」、「甘やかされて育つた若社長」、「社長を置いても実権を離さない父親」など、直接このテーマに關

ことの最大の目的は、「会社を潰さないこと」である。そのなかで、後継者をつくるというのではなく、それが事業の生命そのものである。事業承継の目的に

通じる、大きな意味を持つ「もう一つの事業」である。

もちろん、これまでなされたことを漫然と続けるだけ、現在の変化を乗り切ることは不可能である。二代目による承継の問題を、経営革新の絶好の機会と捉え、そのための方法を説いているのも本書の特徴である。経営革新は、中小企業にあつては、トップの仕事である。そのなかで、トップの交代は、企業の内向きを変え、広く世界に顔を向けさせるチャンスをも供する。

きわめて繊細な配慮をもつてなされる助言が本書の強みであり、おそらく経験者にとつてはなおさら万感の重みをもつて迫つてくるものばかりである。もつといえど、会社を経営する一読をお勧めしたい。

社会生態学研究者 森里陽一